

「地域社会と大学資源の相互活用方策」の社会的実験を実施して

中村祐司（宇都宮大学国際学部）

本調査研究において、大学祭期間を利用して、地域連携実践の社会的実践を実施することとなり、まずは、以下のような企画案を04年10月27日に作成した。

企画案

宇都宮大学峰が丘祭（11/21 11/23）期間における重点研究プロジェクトの実践

「地域社会と大学資源の相互活用方策をめぐる調査研究」

宇都宮大学と地域スポーツ・文化活動組織との相互連携モデルの構築

2004年10月27日

企画テーマ名：「宇都宮大学とこどもたち」

こどもたちに親しまれる大学キャンパス環境の創出を目指して

実施日時：2004年11月21日（日）および11月23日（火）10:00～17:00

実施場所：宇都宮大学峰キャンパスにおけるテント（当プロジェクト本部）、メイングラウンド、ゆうゆう歩道、ガーデニングエリア、市民農園、フランス式庭園など

対象者：上記日時に宇大キャンパスを訪れた小学生

（とくに、宇都宮市東峰南自治会志峰班所属のこどもたちや宇都宮市泉が丘地区における総合型地域スポーツクラブ「友遊いずみクラブ」のメンバーであるこどもたちを主な対象者として想定）

事業内容：「友遊いずみクラブ」によるスポーツ種目のデモンストレーション試合や模範演技、教員・学生企画によるガーデニング教室、市民農園、運動ウオークラリー、紙芝居、手品・クイズ、ミニ英会話教室、ポスター展示、フリーマーケット、ミニ演奏会、大学運動部（野球部、サッカー部等）学生によるスポーツ指導ないしは試合見学、スペシャルオリンピックスその他地域文化活動組織のパンフ紹介（サン・カルチャークラブ、ホット・雷都・HOT）など

事業主体者：上記宇都宮大学重点研究プロジェクトチームを構成する教員と各研究室所属の院生および学部学生など

教員：中村祐司（国際学部）、山根健治（農学部）、野口良造（農学部）、森本章倫（工学部）、廣瀬隆人（生涯学習教育研究センター）、加藤謙一（教育学部）、院生：藤林・田中（山根研究室）、パウエル（中村研究室）など。実務窓口は中村とパウエル

*上記事業本部（テント設定。テント、長机一つ、パイプいす2つは大学提供。場所や大学会館隣の情報処理センター横、あるいはグラウンド側面（中村研究室学生確保のテント）。

<大学祭当日までに詰める項目内容>

1. いずみクラブに趣旨説明（メインは学祭後の大学体育館やグラウンドの定期的クラブ利用）と参加要請（10月27日のクラブ運営会議）。提案受け入れの場合、具体的な参加日時や内容について（グラウンド使用時間等は優先。事前の下見練習も可。ただし、早急に大学本部に連絡の要あり。現段階ではグラウンド利用はメインがサッカー部 OB 試合、サブが野球部 OB 試合のみ。この日の運営会議を受けて対象を志峰班といずみクラブのこどもたちを対象とするサッカー部・野球部に指導の打診のケースもあり。現在、研究室4年生に打診中）

2. 各事業の具体的実施プランの確定と事業協力者（学生）の確保

3. 11月4日（木）18時から生涯学習教育研究センターで開催の当プロジェクト会議で事業内容と運営細部を確定する方向

事業責任者中村祐司（国際学部教員）作成

上記企画案をもとに、04年11月4日に「地域社会と大学資源の相互活用方策をめぐる調査研究 大学祭事業打合せ会議」を開催し、以下のような内容で、審議を進めた。なお、この場において教育作成の企画案に加えて、一部学生からの企画案も提供された。

宇都宮大学重点研究プロジェクト 2004年11月4日(木)18時 工学部森本研究室
「地域社会と大学資源の相互活用方策をめぐる調査研究」

大学祭事業打合せ会議 (= 第14回「ひやもなかの」打合せ会議)

1. 本プロジェクトの趣旨説明と大学祭事業との関連について中村から説明
2. メンバー紹介

国際学部中村祐司研究室: 瀧(学部4年)、菊地(学部4年)

(中村研究室からは他に院生パウエル、学部4年の坪井、石原、紺野、屋比久、松本)

農学部山根研究室: 院生の藤林、田中、朴、鈴木

農学部野口研究室: 阿部(M1)、屋地(学部4年)

生涯学習教育研究センター: 矢吹(M2)、福島(学部4年)、福田(M1工研)

工学部森本研究室: 3名?

3. 大学祭事業についての説明と話し合い(廣瀬研究室が進行に協力)

テーマ:「宇都宮大学と子どもたち 子どもたちに親しまれる大学キャンパス環境の創出を目指して」(小テーマは各研究室で設定)

実施日時: 2004年11月21日(日)および11月23日(火)10:00~17:00 (実質的には両日とも11:00~16:00ぐらい)。11月22日は休みということで確認(野口研究室)。22日はテントは終日たたんでおく。

実施場所: テント2カ所(メイングラウンドC棟寄りのサッカーゴールの裏手(当プロジェクト本部)と、大学会館横か情報処理センター横のどちらか)、宇都宮大学峰キャンパスにおけるテント(当プロジェクト本部)、メイングラウンド、フランス式庭園、ゆうゆう歩道の一部、ガーデニングエリア?など)。テント周辺にも多少のスペースは取れそう。

対象者: 上記日時に宇大キャンパスを訪れた小学生(とくに、宇都宮市東峰南自治会志峰班所属の子どもたちや宇都宮市泉が丘地区における総合型地域スポーツクラブ「友遊いずみクラブ」のメンバーである一部子どもたちを主な対象者として想定)

事業内容: うつのみやフレンドパーク(確定)、「友遊いずみクラブ」によるスポーツ種目のデモンストレーション試合や模範演技(調整中)、ガーデニング教室、市民農園、運動ウォークラリー、紙芝居、手品・クイズ、ミニ英会話教室、ポスター展示、フリーマーケット、ミニ演奏会、大学運動部(野球部、サッカー部等)学生によるスポーツ指導ないしは試合見学(やるならこれから。本日の話し合い状況を見て判断)、その他地域文化活動組織のパンフ紹介(ホット・雷都・HOTによる農場野菜販売(調整中。本部テント横の小スペースのみ提供)など。*本日の会議で方向性を固めたい愛いずれも未定段階。

(当日の教員参加は、中村・山根は21日と23日参加可)

4. 事業内容案について各研究室から説明(活動場所についても)と調整

中村研究室(資料を参照)

山根研究室

野口研究室

廣瀬研究室

森本研究室

5. 各研究室の責任者を決める

携帯と添付ファイル受け取り可のパソコンのメール連絡先の2つ。当日連絡のための携帯の電話番号も。

yujin@cc.utsunomiya-u.ac.jp

まで早目に連絡を。今後の連絡は各教員と研究室責任者に連絡するので、責任者がメンバーに伝え、責任者を通じて中村まで連絡してほしい。

6. 謝金の取扱いについて

(1) 手続きは最初だけ。口座振込届出書(院生・学生に配布)。銀行振込のみ。通帳と印鑑(印鑑は普通印)。

明日11月5日(金)に口座振込届出書記入の上、中村研究室以外の院生・学生来れるか。

10時か14時に中村研究室(共通教育C棟5階=メインランド隣接の白い建物=共通教育C棟=留学生センター)。中村と一緒に国際学部事務室に届出。研究室電話 028-649-5181。明日の10時か14時無理な場合、他の時間帯可。それでも無理な場合は、来週以降。*この件についてはこの場で決めておきたい。作業開始日はこの口座振込届出書を提出してから。

(2)「謝金の支出について(依頼)」用紙の書き方

実施機関は11月24日まで(記入済)。時給は950円で計算

一人につき2枚配布(記入例と用紙)

注意! : 1回1回の作業ごとに書くのではなく、11月24日までに何回か行った作業分をまとめて書く(提出はこの用紙に関しては1枚のみ)

(3) 出勤表(兼支給調書)について(一人一枚配布)

各作業の監督と出勤表のチェックは各研究室の教員が行うことを前提に。

研究協力者(院生・学生)は、作業を行った日の業務内容を簡単に記入。勤務時間について2行になっているのは、4時間毎に1時間は休憩を入れることになっているため。作業時間の上限は8時間。作業時間は、最も早く7時から。終了時間は最も遅く18時まで。したがって、例えば、7時から8時間の作業時間を確保するとすれば、勤務時間欄には、

(例) 7:00 ~ 11:00

12:00 ~ 16:00 と記入。

9時から8時間の作業時間を確保するとすれば、

(例) 9:00 ~ 13:00

14:00 ~ 18:00 と記入。

注意! ただし、仮に日中の時間を確保できないため、18時から22時まで作業を行った場合は、各研究室の教員の了解を取った上で、出勤表の7時~18時の中に盛り込むようにしてほしい。また、所属学部の事務に通す必要は全くなし。

注意! 研究協力者印のところは自分(作業)の印鑑を押す。「日給又は時間給」のところは、既に中村が950円と記入済。その右の「日数又は時間数」の欄は、11月24日までにを行ったトータルの作業時間数を記入する(日数の記入は不要)。そして、合計欄にトータルの受け取り額を記入する。

授業時間とは重ならないように。また、教員が出張等で大学不在の際は、出張前に作業開始を教員が確認したなどとしないと後で支払いを大学経理から渋られる可能性あり。

土日、休日は作業には当てられない。ただし、11月20日(土)の準備作業日、11月21日(日)、11月23日(火)は中村出勤扱いとすることで院生・学生は作業可。

(4)「謝金の支出について(依頼)」用紙1枚と出勤表(兼支給調書)1枚は、11月24日(水)以後、できるだけ早目に各研究室の教員に提出する。教員はチェック、コピーした上で、原本を中村まで手渡し(ないしは学内便送付)する。中村が国際学部事務に提出し、12月(何日かは不明)に大学経理から各口座に振り込まれる。

7. 次回打合せ会議の日程調整と次回までにやっておくべきことについて確認

8. その他

必要な備品・消耗品関係については、重点研究プロジェクト経費から生協で支給購入という形であれば、中村から申請は可能。責任者を通じて中村までメール連絡で可。ただし、時間的に数日かかるかもしれない。生協以外では間に合わないのではないかな。

廣瀬研究室からマジック、模造紙など余分があり、提供可能とのこと(責任者間で協力してほしい)

11月4日の協議では各研究室から協力者として参加する学生や院生も参加した。ここで関係者が直接に顔を合わせたことで、実質的に動き出していくこととなった。しかし、実務面で調整しておくべきことは多々あった。例えば、協力者である学生・院生に対する謝金の支払い方法の認知がそれである。

本プロジェクトの実践において、大学から支出されている資金の一部を謝金として用いるためには、上記会議配布資料にあるように、口座振込届出書や謝金支出依頼書の記載方法などについて間違いないように説明する必要があった。学生・院生の授業時間と作業時間とが重複してはいけないといったことや、教員が出張する場合のチェック機能の確保の点などにも注意を払う必要があった。このあたりの調整実務については、会計担当事務とのやり取りも含めその後もかなり煩雑な手続きが必要となった。

いずれにせよ、事業を実施する上での基本的体制がこの日にその大枠は整ったのである。

その後、各研究室の責任者についてはパソコンアドレス、携帯アドレス、携帯電話番号の一覧を作成し、メーリングリストを用いて必要な連絡を行うこととなった。

各研究室に必要な備品や消耗品の購入について、直接店舗に出掛けてその場で購入することが可能だと分かり、大学の会計からカードを借りて購入を行った。品物一つ一つを納品済としてパソコンから申請する作業は、単価記入等の省略が可能であったため、予想していたよりは煩雑さを感じなかった。事務対応でいえば、むしろ大学本部の方が柔軟であり、学部レベルは本部の意向を気にして、やや柔軟性に欠ける側面があるように思われた。

大学祭で拠点となる二カ所のテント確保については、結果的には好位置を確保することができた。しかし、パイプイスや長いす、テントの貸し出しなどをめぐり、大学祭実行委員会事務局とのやり取りは必ずしもスムーズに行ったとはいえなかった。仮に、一研究室で当初から別の出店を検討していなかったならば、グラウンド内におけるテントは確保できなかったように思われる。

大学祭当日には、以下の実施担い手者用のパンフを用意した。

テーマ「宇都宮大学とこどもたち」

-こどもたちに親しまれる大学キャンパス環境の創出を目指して-

日時：2004年11月21日（日）および11月23日（火）

時間：いずれも10:00～16:00

場所：宇都宮大学峰キャンパス

中村屋（第1テントおよび第2テント）

第1テント「うつのみやフレンドパーク」

（共通教育 C 棟＝留学生センターに隣接する大学グラウンド。サッカーゴールのちょうど後ろ側）

徒歩 30 秒の距離

第2テント「芸術の秋を満喫しよう！・3D・VR シミュレーション体験・IT くわ“びよんきち”の製作」

（野外特設ステージの真横。大学会館入り口付近）

第1テント「うつのみやフレンドパーク」

11月21日および23日

9:00 集合

10:00 第1回目ウオークラリースタート（出発時刻は10:00、10:10、10:20の3回を予定。

1回当たりの参加グループの上限人数は7人。1グループ当たりの所要時間は1時間を予定。プリントはしないが、ゴール時にグループ全体で写真撮影する予定）

12:00 第1回目ウオークラリー終了

13:00 第2回目ウオークラリースタート（出発時刻は13:00、13:10、13:20の3回を予定。

1回当たりの参加グループの上限人数は7人。なお、内容は1回目も2回目も同じ。21日と23日の内容も同じ。アンケートも実施（母親にも）

15:00 ウオークラリー終了

*参加者には「ぼうけん書」を配布。屋台の割引券あり。スタンプ、輪投げ等もあり。ガイドさんの確保が鍵。景品もあり。宇大ネーム入りのシャーペンあり。

*その他、適宜、「パウエル君の英会話」(名札に参加者の名前を英語で書き、積極的に参加をさせるように、子供たちを二つのグループに分ける。そして簡単な挨拶して、warm-upゲーム(rock, scissors, paper)をする。子供たちにポイントカードをわたし、宿題を出してポイントをつける。最後のところプレゼントをあげる。

*また、「ドッジボールで遊ぼう」(中村担当)もあり。

*ウオークラリーの合間にお母さま方等のお茶休憩のスペースもあり。

第2テント「芸術の秋を満喫しよう!・3D・VRシミュレーション体験・ITくわの製作」

<芸術の秋を満喫しよう!>

実施日時は11月21日および23日の10:00-16:00まで。時間は適宜・随時行い、特別な時間設定はしない。雨天の場合以外はテント前で実施。世界に1つだけのポストカードを作ろう(一人30分程度。一人当たり2枚まで)。オブジェを作ってみよう(どんぐり、松ぼっくりなどで。一人一時間ほど。一人当たり一作品まで)。キャンパス内を少し散策するケースもあるが、テントでの対応は可の状態にしておく。アンケートの実施あり。

<3D・VRシミュレーション体験>

実施日時は上記と同じ。

宇都宮市大通りにおけるLRT(新交通システム)導入イメージの放映並びにアンケートの実施。フライトシミュレーションの実施。場合に応じて、ヘリコプターでの飛行映像や降雪の映像なども提示。発電機については当日の朝に調整。シミュレーションの時間は4分程度。体験の場合は4-5分。第2テント内を使用。粗品としてティッシュ。

<ITくわ“ぴょんきち”の製作>

実施日は11月23日のみ

テントの外側端にポスターとクワの設置

刃物には触れさせないように注意を払う。

簡単なアンケート調査を行う。

アンケートについては各プロジェクト毎で別々に行う(後日、ここから得られた情報については共有する)

第1・第2テント共通の留意事項

<参加団体受付と開会式>:21日9時40分に参加団体の受付があるので注意。同日10時から開会式。野外特設ステージ向かいの本部前で。

<撮影担当>:両日とも第1テント関連が中村・菊地。第2テント関連が藤林・田中。23日には阿部・屋地も加わる。複数の子どもたちは遠目から顔がはっきりしないよう撮影した方が無難。

<責任者携帯番号> *教員のうち中村、山根が両日とも参加

第1テント

中村祐司(プロジェクト総括責任者。第1テント教員責任者)

瀧純代(第1テント責任者。中村研究室)

菊地史子(第1テント副責任者。中村研究室)

第2テント

山根健治(第2テント教員責任者)

矢吹大地(第2テント責任者。廣瀬研究室)

藤林希美(第2テント副責任者。山根研究室)

河野友彦(森本研究室)

阿部修也(野口研究室)

スタッフ(上記以外。聞き書きのためご記入の場合、了解願います。)

中村研究室：パウエル、坪井、石原、紺野、屋比久、松本

山根研究室：田中、朴、鈴木

野口研究室：屋地

生涯学習教育研究センター：福島、福田、千葉

森本研究室：山下、豊岡

その他、当日の「ボランティアスタッフ」の協力あり。

以上、顧客（サービスの対象者）との関わりが出てくる以前の段階ではあるが、ある事業を行おうとする場合の原動力として、まず不可欠なのが人手（ひと）であり、しかも自主的に事業遂行上の課題を見出し、その克服に積極的に動ける者が事業の基礎を支えることが分かった。

本事業の場合、理念的な側面においてはかなり固まってきてはいる。しかし、実践のレベルは全くといっていいほど未知数であった。考えてみれば院生・学生の活動力は「大学資源」の典型的なものであり、各々の得意分野・専門分野を生かした、しかも学部間の垣根を超えて協力し合った事業遂行というのは、極めてユニークで斬新な試みではなかっただろうか。

そして、こうした院生・学生の協力を「ボランティア」活動だとして無報酬の取扱いを敢えてしなかった。いくら文化祭期間中のそして、運営のプロではないアマチュア的な催しものであるとしても、一定の労働への対価を支払うという考え方をとった。そのことで「ボランティアだからいい」という考えを排除し、自己が提供するサービスに対して、一定の責任を自覚してほしいというねらいがあった。結果は成功であったように思われる。

さらに、「大学資源」の有効活用という点では、飲食物の販売が主であった大学祭という場に敢えてこどもたちを対象とした本事業を盛り込んだことに意味があると同時に、この期間中大勢の人々があつまる機会を利用したという意味でも、ソフト資源をうまく活用した側面がある。同時に、大学のグラウンドを目一杯活用し、ウオークラリーやオブジェ作りに典型的なように大学敷地内の自然物や大学施設というハード面での資源を生かした貴重な事業であったという言い方もできるであろう。そのことは以下今回の事業に参加協力した以下の学生の感想からも窺うことができよう。

<活動に参加した研究室学生の感想>

「今回、この企画をやると決まったときはどういうものになるか全く見当が付きませんでした。中村先生や瀧さん、菊池さんを始め、中村研のみんなと他研究室の方々の協力で本当に素晴らしい交流の場を作り上げることができたと思います。

学祭当日、予想以上の数の子供達が遊びに来てくれて、冒険の書を片手に我先にと走り出して行く子やリーダーシップをとって全体を上手くまとめ上げている子、なわとびでなかなか飛べない子を周りで励ましている子供達を見ながら、私も一緒に楽しむことができたことが何より良かったと思います。

子供達も普段接することのない大学生との交流に最初は恥ずかしがってる様子も見られましたがすぐに打ち解けて、一緒におしゃべりしながらコースを回ったり、ドッジボールをしたり。笑顔の素敵な優しいお姉さんたち(笑)と接し、学祭という大学の開放的な部分に触れる機会を得たことで、子供達にとって大学という場所がこれまでより身近なものに感じられたのではないのでしょうか。

このような大学と地域の人々をつなげる機会が今回限りのものではなく、今後も続いていけばいいなと思います。

みなさま本当にお疲れ様でした！」(屋比久美樹)

「私がこの事業に参加しようと思ったのは、学祭で何か催す楽しさを知っていたから。私は今まではサークルという形でしか学祭に参加したことはなかったため、何か違った形で参加してみたかったというのもあった。こどもをメインにしたイベントということで、自身のこども好きということも手伝い、こどものためと言いながらも自分自身相当楽しんでやっていた。

正直、準備段階では本当にこどもたちが楽しめるか、興味を持ってくれるかという不安もよぎった。学祭当日は、快晴(願いが通じた!!)。開始早々、たくさんのこどもたちが集まってきて、事前に来ると先生から知らされていながらも、そのパワーに圧倒されてしまった。

・・・そんな感じで始まったが、思った以上にこどもたちの反応もよく、ガイド役も楽しかった。こどもたちにグループを組ませると、自然と途中で役割が決まっていたりして、リーダーがチームをひっぱっていく姿勢にも感心した。こどももあなどれないなと思った。

自分に分担された仕事を進めるのが遅かった点、ドリンク販売をおろそかにしてしまった点(湯を温めるために待たせてしまったお客さんごめんなさい。)は反省しつつも、このイベントに参加できて本当によかったと思う。何よりこどもたちの喜ぶ顔が印象的だった。楽しんでもらえて本当によかった。

最後に、中村先生、ゼミの皆、他研究室の皆さん、お疲れ様でした。学生最後の文化祭で貴重な体験ができた上、すごい楽しい思い出ができました。ありがとうございました。」(坪井知子)

「私が学祭に何かの形で参加するのは、今回が初めてであった。今までは、学祭に行かなかったり、行ってもあまり物を見るような事をしていなかったのである。だから、今回自分が企画・運営する立場になって正直とまどってしまった。

だが、みんなで協力し、企画が練り上がっていくにつれて、企画を考える楽しさを感じる事ができ、非常に貴重な体験が出来たと思う。自分は、主に印刷物のレイアウト等を担当したのだが、原本がしっかりしていたため作業がともしやすかった。皆がしっかり動いてくれたからこそうまく作れたのだと思う。

本番は、様々なハプニングがあったが、一番良かったのは子供たちが楽しんでいって

れたことだと思う。企画を考えていた当初は、本当に楽しんでくれるのか不安部分があった。初日は特にどんな反応をしてくれるのかが分からなかったので、緊張してしまった。でも、ウォークラリーが始まれば、お兄さんのような行動をしてくれる優しい男の子や、素直にはしゃいでくれた女の子など、こちらの心配がふっとんでしまうような反応が返ってきた。中には、冷めた子や言う事を聞かない子もいたが、参加してくれた子供たちは、1日目も、2日目も良い子たちばかりで、彼らと一緒に楽しい時間を過ごせて本当に良かったと思う。

今年が、自分が学生で参加する最後の学祭になったわけだが、学祭に参加できて本当に良かったと思う。研究室で来年参加するかは未定だと思うが、是非続けてみてはどうかと思う。きっと、面白い2日間になると思う。」(松本千穂)

「まずこのプロジェクトに参加して驚いたことは、4つの学部(工学部、農学部、教育学部、国際学部)が自然に協力し合って、ひとつのことに取り組んでいる姿勢であった。それは、地域における大学のあるべき姿を作り上げていこうとする先生方の熱い気持ちで成り立っているのだらうと感じた。協力している先生方は、かなり前から親睦を深めていたらしく、今回のプロジェクトは、その協力がはじめて現実のものとして、目に見える形になったものであった。このようなことが、活発に行われるようになったら、大学、そしてそこにいる学生が地域に貢献する機会が増えていくだろう。それは、地域にとって、大学にとって、そして学生にとっても有益な財産になることは間違いない。

そのプロジェクトの中で、私たち、中村祐司研究室は、「うつのみやフレンドパーク」というものを行った。子どもたちに、ゲームに参加しながらキャンパスを歩いてもらうことで、大学内、大学祭の様子を肌で体感してもらおうという企画である。一から企画を練って、台本、パンフレットを作り、小物などを作り、一通りのことはすべて自分たちの手で行った。その労力は一言では語り尽くせないものがあった。企画を一から立ち上げること、そしてそれをうまく起動させるために準備することを通して、企画することの楽しさ、そのためにどう動くかという段取りの仕方、また、関わる人をうまく動かしていくことの難しさを知った。自分にとって大変いい経験になったと思う。

当日は、子供たちがたくさん訪れてきてくれて、なかには2回参加してくれる子供もいた。自分たちが企画し、作り上げたものに楽しそうに参加してくれている子供たちを見て、このプロジェクトに関われてよかったと思った。学内ウォークラリーが終わったあとも、みんなで(大学生含む)ながなわで遊んだり、ドッジボールしたりと、「うつのみやフレンドパーク」の名のとおり、学生、大学祭、子供たちの触れ合ういいきっかけの提供ができたと思う。

このようなプロジェクトにおいて、子供たちが、周りの親や大人とは違った年代の学生と触れ合うことは、今後の発育上、とてもいい機会になるのではないかと思う。さまざまな年代と関わることは、その考え方のちがいなど身を持って体験することにつながる。その印象は、情報として得ただけのものとは比べても、明らかに心に残るものとして、その子のなかに位置付けられると思われる。そのことが刺激となり、いい効果を与えられるような接し方ができたかは分からないが、そういった心構えで子どもと接することが出来れば、いい効果が現れるのを期待してよいのではないか。

今回のプロジェクトを通して、大学と子ども達、そしてそれを取り巻く地域とは、きっかけさえ提供できれば、うまく付き合って、相互効果が得られるものだという事を感じた。これを一過性のものとして終わらせないために、このようなプロジェクトがあり、効果が出るということ、今後の研究や調査を通じて、内外に公開していくことが大切だと思う。」(菊地史子)

「初めてこの企画について話をうかがった時、学祭まですでに1ヶ月をきっていました。先生からの提案をうかがって、正直「今からじゃ無理なのは…」と思っていました。しかし、「なせばなる」と思い、研究室の仲間をはじめ他学部の研究室のみなさんと一緒に準備を進めました。

私たちの企画を決める際、「子どもたちが喜んでくれて、かつ、私たち自身も楽しんでできるような企画をつくろう!」ということが一番に考え、『うつのみやフレンドパーク』を催すことにしました。私自身、大学の構内を細かく気にしながら散歩したことがなかったため、この企画は必ず子どもたちも楽しんでくれるだろうと確信していました。

しかしながら、準備まで1ヶ月をきっていたこと、その準備の途中で1週間ほど留守にってしまったことなどが原因で、このプロジェクトに携わってくださった多くの方々にご迷惑をおかけしてしまったとともに、準備の時点からもう少しこだわることができたのではないかと、という後悔があります。とはいえ、時間がなかったわりにはいい企画を行うことができたという達成感もある、というのが本音です。

大学祭当日は、『うつのみやフレンドパーク』の実施だけでなく準備から片づけまでを私たちの友人がボランティアで手伝ってくれ、本当に助かりました。そしてそのことで友人の大切さを再確認することができましたし、子どもたちとの友情の輪だけではなく、研究室の仲間や友人、そして農学部、工学部、教育学部のみなさんとのつながりも深めていくことができて本当に良かったと思います。

他学部と共同で何かをするなんて、今回の企画に参加する前は考えられませんでした。しかし、せっかく同じ大学に在籍しているわけですから、これからも学部同士で交流し、協力して今回のようなプロジェクトなどを行うことは有意義であると思いました。卒業する前にこの学祭重点研究プロジェクトに参加することができて、私にとっては大きな財産になりました。このチャンスを与えてくださった先生方に感謝したいと思います。」(石原佳菜子)

「今回の学祭に関して、途中までの内容が変わり、その後の内容に関して、代表の二人に企画を任せてしまった点が反省点だと思います。研究室メンバー同士の情報の連携が上手くいかず、お互いに迷惑をかけてしまったり、動きにくくなってしまった部分がありました。その点は大いに反省しています。

ただ、準備の段階、当日の運営はとても有意義だったと思います。サービス券の交渉や小物づくりを担当していたので、友人・知人に連絡をとりサービス券を提供してもらう約束を取り付けたりする段階で、学祭への意気込みを高めあったり、小物作りの作業している時は、数年ぶりの工作がとても楽しかったです。当日も多くの子供たちが遊びに来てくれて、にぎやかに楽しめたことが良かったと思います。子供たちが一生懸命長縄跳びをしたり、スタンプを探している後ろ姿を見て、小学生にとって、未知な領域だった大学という場所が少し身近になったのではないかと期待しています。

宇大は、緑も多く、子供たちがもっと自由に遊べる大学になれば、自然とその保護者にあたる大人たちも大学に親しみを持てると思います。将来的に地域に開かれた宇大になって欲しいと思います。」(瀧純代)